論　説
日本人の自然観と都市形成・都市景観

土　岐　　寛

目次

はじめに
1　日本人の自然観と山の辺景観
2　日本の集落・都市形成と都市景観
（1）日本の都市は田園都市
（2）「都市農村混合型」の都市景観
3　“市民意識”と都市景観
（1）市民意識の形成とヨーロッパ都市
（2）わが国における“市民”の欠落
4　城壁と海岸線
5　都市の中心性と建築思想
（1）中心が空虚な東京
（2）木造建築の可能性
（3）木造建築における型の継承
（4）「移し」と「写し」と「見立て」
（5）小京都の思想
（6）景観の心理操作
（7）寓居の思想
（8）浮上しない都市景観
おわりに

はじめに

貧困な日本の都市状況、都市景観はどうしてもたらされたのか。この点に関しては、いくつかの論点がある。ひとつは日本人の自然観と都市形成の観点からのものである。ヨーロッパ都市のような厳しい自然と外敵に対抗する緊密な生活・防衛共同体としての都市形成ではなく、温和な自然と融合し、都市と農村の境界がない自然増殖的な都市形成である。全体計画がなく、部分的な手直しや手入れを繰り返してきた歴史である。

２つ目は、明治以降の近代化における都市景観整備の優先順位の低さ、つまり都市は富国強兵＝経済効率や立身出世の場とみなされ、自由放任主義的政策がとられてきたことである。景観に関する公的規制がほとんどなかったことがそれを物語る。国民レベルでは土地所有権意識の高さに対する景観の公共性への認識の低さがあった。

３つ目は、２つ目に重なるが、都市景観への共同感情の形成がなかったことである。明治以前には限られた資材や用材、技法によって町並みの調和がとれ、外国人などに高く評価される状況があったが、明治以降は古いものがことごとく否定された。廃仏毀釈によって、お寺や五重塔の破壊など、仏教世界が否定され、浮世絵、仏像など国宝クラスの美術品の海外流出が相次いだ。

近代化、流通網の拡大で、資材調達も自由になったが、デザインは施主の自由に任され、不統一で自己主張するだけの建築物で街が埋め尽されることになった。一定の都市美運動は行われたが、ヨーロッパ都市のような共通した都市景観認識は育たなかった。したがって、戦災や天災で街が破壊されても、同じ街並みを再建する発想はなく、実現もされなかった。ワルシャワやミュンヘンやローテンブルクが全壊に近いような戦災被害からほぼ完全に復元したのと対照的である。

幸か不幸か明治以降の鉄道路線網などから外れて、近代化から取り残され

たために古い町並みが残った信州の妻籠宿や海野宿が、伝統の再評価とともによみがえったのは希少例である。しかしそれも、高度成長期を経た1970年代まで待たなければならなかった。

4つ目は、都市景観の主要な構成要素である道路と建築物のうち、後者に関わる建築家の役割である。現在、東京の原宿・表参道、青山通りなどは、人気建築家が競い合う建築の見本市のような状況になっている。建築物が街の個性や表情を支配する以上は、建築物相互にデザインの相互浸透や調和があって然るべきである。しかし、現実はクライアントの注文と意向に添いつつ、建築家の個人的な思想や趣向が優先されており、落ち着かないバラバラな街並みとなっている。

本稿では、日本人の自然観と風景観、住居観を歴史的に考察し、それが集落・都市形成にどのように反映しているかをみていきたい。ヨーロッパ都市との比較では、風土や都市社会構造に加えて、市民意識がどのように関わってきたかが問題の焦点となる。

1　日本人の自然観と山の辺景観

樋口忠彦によれば、日本の自然条件は、島国、温和な気候、森林、山国という4つの特色を有している。温和な気候は、自然との違和感や対立感よりは、自然との親密感を育んだ。ヨーロッパのように働きかけ、切り開き、厳しく克服すべき対象ではなくて、母性的な自然といえる。四季の存在も、季節に対する鋭敏な感覚を養った。また、生産基盤が稲作農業であったことは、四季のリズムに呼応して生活を営むスタイルを形成した。総じて、日本人の自然観は感性的であるとともに受身的である。[1)]

こうした国土のなかで、日本人が好んだ定住・棲息の地は、背後に山があり、目の前に平野が広がる“山の辺”であった。そこでは山の幸と水に恵まれ、農耕適地だからである。日本人の棲息地の景観を盆地、谷、平野と大きく3分類したとき、山の辺の景観はそのすべてを含んでいる。山の辺は山を

背にした盆地周縁部である。人は広がりのある場所においては、背後による所がないと落ち着かない傾向をもっている。山の辺の景観はそうした心理的条件や原理によって日本人が好み、選び取ってきた地形の典型とされる。[2)]

山の辺の景観への傾斜は実証的にも論証される。「日本の古くからある集落を見ても、それが盆地や谷や平野であろうとも、ほとんど山や丘陵を背後に負う山の辺に立地している。前方に広がる平野は、人間が棲息していく上での活動の場を与えてくれた。さらに、人間が棲息していく上で水は必須の条件であったが、山の辺においては、山から流れ出す清い水が手近に得られるとともに、その水の流れは高度な技術がなくてもコントロールできる小河川であった。[3)]」

こうして野良、野辺、里山、奥山といった全国共通の風景の展開が見られ、「あらゆる地域が相似形の構造を持った国」が造られていったのである。[4)]

しかし、盆地全体を統轄する権力が形成され、碁盤目状の都市がつくられて、その区画への移住を強制されると、人々は心のやすらぎが失われて不安な気分に襲われる。平安京において自然を取り入れた庭園づくりなどが流行したのは、山の辺の景観の代償景観であったと観察される。さらに権力の規律が緩んでくると、ヨーロッパや中国のように城壁がないことも幸いして、人々はそれぞれ快適な地へ移っていく。もちろん、山の辺の地へである。これは庶民レベルだけではない。貴族も同様の行動をとった。[5)]

平城京もそうだった。「平城京では、都が京都に移るや、中心は東大寺、興福寺周辺の東の山の辺に移り、旧都は農地化し現在に至っている。平安京では、遷都後わずか数十年にして右京がさびれ、貴族の多くは競って左京や京外の山の辺の景勝の地に邸宅を構え、中心である内裏も、このような邸宅の里内裏に移り、有名無実化していき、都全体は、北東の山の辺に徐々に変位していくことになる。[6)]」

地形に変化があり、眺望も備わった山の辺の地は、すぐれた庭園を造るために大切な場所でもあった。離宮、別荘、あるいは隠遁の場としても最適と

考えられた。死者を送る場所としても珍重された。足利義政が十数年にわたって景勝の地を探し求め、最後に出会った東山浄土寺山は、すでに墓地が営まれていたが、義政は多くの抗議や非難にもかかわらず、墓地を取り壊して東山山荘造営を強行した[7]。これが名庭園のある慈照寺銀閣であるが、山の辺景観は“借景”に止まるものではないことを教える。

このように樋口は山の辺景観を意識的に評価し直している。大事なことは、すでに存在している山の辺の景観を保護、保全していくと同時に、山の辺から離れた現代都市のような人工的環境においても山の辺の景観を代償していく必要があるのではないだろうかという[8]。樋口の考察は示唆的である。

2　日本の集落・都市形成と都市景観

(1) 日本の都市は田園都市

こうした母親の懐のような場所である山の辺への定住志向が、日本人の自然観をなお自然を受け入れ、融和する方向に傾斜させたことは明らかであろう。都市は城壁を持たず、農村部と連坦しており、都市の内部には山の辺景観の代償景観が持ち込まれる。

なぜ日本では城壁都市が形成されなかったのか。この問題については多くの研究があるが、香山健一は次のように整理している。第一に、日本はその地政学的特色のゆえに、外敵の侵略・征服を一度も受けたことがない世界でも例外的な国であった。ヨーロッパ諸国のような過酷な対外戦争や、外敵の侵略、支配の経験がなかったことは、和を尊ぶ温かい家族的人間関係を温存、発展させ、独特のイエ型社会を形成した。第二に日本人の自然観は自然と人間が調和と共存のなかに生きる温和なもので、都市と農村はむしろ同化すべきで隔絶されるべきものではなかった。名花、名木、名園を競った江戸時代の都市は江戸、京都、金沢などをはじめとして、まさしく緑と花の田園都市だったのである[9]。

内務省地方局有志が著わした1907年刊『田園都市と日本人』でも、目指さ

れていたのは田園都市だった。それも東京、京都だけでなく、全国の都市を見据えたものだった。「人口もっとも密集せる首都すら、なおかくのごとし。ましてやその他地方の都市にありては、山に倚(よ)り水に臨みて、遠くこれを望めば、人家いずれも緑樹のあいだに隠見し、たとえ戸毎に農園を備えずとも、天然の光景よりこれをいえば、多くの都市はおのずから田園の趣味をおびざるなし。」[10)]

日本の都市は最初から田園都市であったともいえる。江戸時代に江戸を訪れたヨーロッパ人が、百万都市でありながら、ヨーロッパの都市とはまったく異なり、他のアジアの都市にも似ていないことに驚いている。「つまり、江戸は彼らの基準からすればあまりに自然に浸透されていて、都市であると同時に田園であるような不思議な存在だった。ひと口でいえば、それは巨大な村だったのである。」[11)]

「突然江戸に来た者は、将軍の居城のみが都市自身であり、これに反し江戸の市街地はいずれも郊外かあるいは周辺の村落だと思うであろう。」というラインホルト・ヴェルナー[12)]の記述はヨーロッパと日本の都市形成の基本的相違を言い当てている。黒を基調とした木造家屋や緑の丘陵、谷間の清流、庭園、寺社、森、野原などは「江戸の美は田園的なもの」を印象づけたのである。[13)]

明治維新から間もない1878年に来日し、日本各地を旅行したイギリス人の女流探検家、イザベラ・バードは詳細な観察記録を残したが、そこでも田畑がよく耕作され、自然と一体化した生活が讃えられている。とくに山形南部、置賜地方の米沢盆地は、「米、綿、とうもろこし、煙草、麻、藍、大豆、茄子(なす)、くるみ、水瓜、きゅうり、柿、杏、ざくろを豊富に栽培している。実り豊かに微笑する大地であり、アジアのアルカデヤ（桃源郷）である。」と書いている。[14)] 都市部では新潟の旧市街を「私が今まで見た町の中で最も整然として清潔であり、最も居心地の良さそうな町である。」「この町は美しいほどに清潔なので、日光のときと同じように、このよく掃ききよめられた街路

を泥靴で歩くのは気がひけるほどである。これは故国のエディンバラの市当局には、よい教訓となるであろう。」[15]と評価している。

もちろん、未開の地の様相を呈した地域も多く、どこでも「異人が来た！」と好奇の目に晒されたが、その時代に女性が安全に一人旅をすることができる、きわめてまれなほど民度の高い国と観察したのも事実であった[16]。イザベラ・バードが巡った当時の日本はほとんど残っていないが、田園都市的な都市状況は変わらないといってよい。

（2）「都市農村混合型」の都市景観

「パリは世界の大都市の中でも、都市全体を宮殿にしようとする意図の明白な、統合が最も進んだ都市[17]」である。だからその社会構造も「盛り場」も都市パリの境界の外には拡大しなかった。反対に東京では、真の意味での郊外が存在しない。都市が田園の中に少しずつ溶解していく現象が見られるだけである。だから、たとえば吉祥寺でも都心の盛り場と変わらない「都市性の興奮」を味わうことができる。逆にパリっ子の８割が郊外に住んでいるのに、そこには都市がないのである[18]。

日本の文化はその最高度の表現において、絶えず自然を指向しており、都市も例外ではない。都市の住居はわずかな庭や緑に固執し、都市全体とリンクする発想がない[19]。多くの外国人が讃嘆した下町の植木鉢や植栽、生垣などはまさに「都市農村混合型」の都市景観である。八代将軍徳川吉宗が民衆を慰撫するために、江戸市中に桜の名所を造ったことなども想起される。

都市農村混合化や脱都市化は20世紀後半の世界的現象だが、日本では近代以前から都市農村混合化が進んでいた。たとえば、江戸の緑被度は　天保期（1830～43年）でみて、緑被地面積4105.0ha、緑被地率42.9％という算定結果がある。その内訳は小規模武家屋敷9.8％、大規模武家屋敷21.2％、寺社地9.1％、農地・樹林地38.7％、水路・河川・崖線21.2％というもので、武家地の比重が大きかった。今日、江戸時代の緑の遺産の約６割は消失したといわ

れるが、東京は日本では最も緑が多い都市のひとつであり続けている。[20)]

この江戸時代の大名屋敷もとくに都市的な特徴は有しなかった。それ自体が城的存在であり、内部には広大な回遊式庭園を設けていた。「この半田園的な性格は日本のあらゆる都市と同様、今日の山の手の住宅にも見いだされる。このように真に都市的でも真に田園的でもない風景が東海道メガロポリスの500キロメートルにわたって拡がり、日本の小さな平野を特徴づける人口密度の高さと相まって、国全体に拡がろうとしている。」[21)] のである。

3　“市民意識”と都市景観

（1）市民意識の形成とヨーロッパ都市

ここで市民意識と都市景観について、ヨーロッパ都市と日本都市とを比較検討してみたい。ヨーロッパ都市の場合、増田四郎（1908～1997年、一橋大学名誉教授、西洋史、西洋経済史、西洋文化史専攻）によれば以下のように説明される。

中世都市の市民意識と団体的規制のルールであるが、11、2世紀から自覚されてくる市民団体の結束は、その頃から強化される新しい領主権力に対応するものであった。そこで樹立された都市自治の精神は、きわめて民主的な原理に発するものであり、自由な市民、平等な市民の自警・自衛の団体精神に他ならなかった。都市住民は、ひとりひとり、一戸一戸では生活することができないものだという前提の上に立って、公共の施設を共同して築き上げることに協力した。金持ちも貧乏人も公共世界に奉仕するという精神、公共の施設を大切にするという精神、自分の町に誇りを感じ、これを愛するという精神、そのためにはきびしい協働の規範に従うべきで、自分勝手なことはできないのだという精神が培われ、それが西ヨーロッパ市民生活の根底を形成したのである。[22)]

ワルシャワやローテンブルク、ミュンヘンの市民が戦災に遭った街を元通りに復元する道を選んだ背景である。「都市の空気はひとびとを自由にする」

という中世以来の古いことわざの“自由”とは、法的自由のことであり、自分勝手という意味ではない。都市では、農村のように各家族が自給自足の生活をするのではなく、分業と職分を前提とした各種職業の分化があり、そのゆえにこそ多くのギルドやツンフト（職業別同業組合）が結成され、市場や日常の商取引を媒介とした相互依存の諸関係が樹立された。そこで都市の市民が守るべき種々の規範や道徳が要請されたのであり、自己中心の生活態度は、厳しく非難された。「都市法」は、商取引の公正、度量衡の検査、手工業者の誠実さを要求し、市民全体の福祉と安寧の維持を第一の目的とした法規範である。「自分」でなくて、「われわれ」という考え方が優先しており、公共世界のモラルと公共施設の普及・保護が、「われわれ」市民のよりよい生活を維持する最大の前提であった[23]。風景の共同感情成立の基盤である。

ヨーロッパでは国家より先に都市が存在した。近代国家成立の際にも、ヨーロッパでは、都市の諸制度が拡大されて、国家制度のモデルとなった面が多い。救貧法や徒弟法なども、イギリス・チューダー王朝以前から大陸各地の中世都市で実施されていた古い制度なのである。要するにヨーロッパ都市は、近代国家成立以前における“市民の小国家”であり、自力で城塞を築いてこれを警備し、自力で職業教育機関を工夫して子弟を教育し、自力で役人を選出して市政を運営させたのである。その伝統のゆえに自分の都市に対する誇りと自信には、想像を絶するものがあった。王侯貴族の邸館よりも、市の中央広場にそそり立つ立派な市庁舎のほうが、市民たるかれらのシンボルであった[24]。風景の共同感情の具体像である。

（2）わが国における“市民”の欠落

ではなぜ、東洋では「市民」という考えが歴史に定着せず、いつまでも「家族」になぞらえた国家観や非合理的な権威主義が政治の運営や人々の心情を規定したのだろうか。これは増田の大きな研究テーマであった。どんな立派な都市計画を作っても、自分の町を愛する精神と公共道徳を身につけた市民的感

覚＝市民意識の培養に対する不断の配慮がなければ、民主主義的な都市生活は築かれない。家族主義・国家主義・権威主義から「社会」と「市民」を中心とする考えに変革されなければならないのである。[25)]

ここでいう“市民”は、国民と個人の中間に位置づけられるべき公共性と責任を伴った人間像とも言い換えられる。日本にはその歴史がなかったのか。「中世末期にごく一部自由都市の例外があつたにしても、ほとんどすべての日本の都市は、封建領主やその役人に従属してできた都市、かれらに寄生して生活した市民（町人）であり、町人文化や町人気質にみるべきものがあるにしても、市民が自力で誓約団体を結成して、領主に反抗してたたかいとつた『自由』――法的自由などというものはほとんど存在しない。座や株仲間の自治は、なるほどある程度の町人の自治にちがいないが、都市住民全体の自治ではなく、いわば特権階層のあつまりに過ぎない。町奉行や町役人が、封建領主の出先き機関であつたことは、いまさらいうまでもない。また近代になつてからの日本の都市は、農村からの出稼ぎ人の集中する場所か、さもなければ俸給生活者の一時的な集住地に過ぎず、これらをうつて一丸とした『われわれ』などという考えは、どこからも湧いてこなかつた。明治から大正にかけての官吏や軍人、そして実業家でさえ、いかに立身出世的な国家本位の意識に生きていたかを考えれば、このことは説明を要しないであろう。したがつてわが国で都市生活が『自由』であるというのは、ヨーロッパの場合とはちがつて、自分勝手な生活ができる場所、いわば誰にも気がねのいらない生活のしかたと無責任な態度という意味であり、『市民』としての規範を少しもわきまえようとしない自由なのである。[26)]」

それに加えて日本では、国家というものが、ヨーロッパのように市民革命など歴史のある段階で形成されたものでなく、きわめて古い時代から自明のものとして存在し、明治維新以降は特に国家中心の発展があったため、それまで歴史的に発展してきた諸団体の個性も見失われてしまった。したがって「自治」という言葉の本質が理解されず、最初から国家主導の自治体であった。

そのため国家行政や国家権力の中で、「われわれ」の町の法的・歴史的個性を主張する余地はなく、町の特色はその法的な地位ではなくて、単なる情趣的なものにすりかえられてしまった。ヨーロッパ都市のような独自の都市法は獲得されず、まちづくりも国家主導の画一的制度に支配された。ヨーロッパにおける個々の都市の法的多様性と対照的である。[27)]

以上の増田の考察はわが国都市の固有の歴史状況を伝える。わが国で市民意識が育たなかったのは、ヨーロッパにおけるキリスト教的な考え方や誓約団[28)]思想がなかったからではなく、わが国の事情に相応して、国民と個人の中間に位置づけられるべき公共性と責任を伴った人間像が構想、結実されなかったからである。

4　城壁と海岸線

先に「日本はその地政学的特色のゆえに、外敵の侵略・征服を一度も受けたことがない世界でも例外的な国であった。」とする香山健一の文章を引いた。侵略に関しては元寇などの例はある。小規模な侵略もあった。しかし、第二次世界大戦まで征服や占領はされなかった。その大きな理由は日本が島国国家であることである。飛行機がない時代、外敵の侵略は海からに限定される。元寇のように台風や荒波が“神風”となって外敵を撃退することもあった。

これに対して、ヨーロッパ都市では、外敵から市民を守るために周辺を取り囲む頑丈な城壁を造った。夜になると城壁の門を閉ざす。すべての住民はもとより家畜に至るまで、夕方になると城内に入り、しっかりと城門を閉ざすのである。この城壁が都市住民にとってきわめて強い連帯感と共同責任感を抱かせた。外敵からの共同防御に加え、城壁から内部に向かって収斂的に都市を整備するような全体計画が作られた。[29)]

広大なチェコのプラハ城は、いざという時に王の家族や従士だけでなく、農民をもかくまう「逃げ城」の機能を持っていたのではないかといわれる。

宿舎や食料・水の貯蔵庫、武器を作る作業場、井戸、店舗など一個の都市のような設備を備えていた。同一民族間の覇権争いであった日本の戦国時代などと違い、異民族同士の残酷な戦争が展開されたヨーロッパでは、負ければ男は殺され、女は奴隷になるような厳しい現実があり、農民は租税や労役と引き換えに命を保障してもらったのである。[30)]

ヨーロッパのような異民族相互の対立抗争と都市・農村の境界がなかった日本に城壁は必要なかった。都市ではなく、大名や天皇だけが城壁で守られたのである。日本全体を考えたときは、海こそが城壁であったと解することができる。国防は海防であり、開城ではなくて開国だった。日本の海岸線は、総計３万５千キロあり、アメリカの1.5倍、中国の２倍に当たる。国土面積は中国の25分の１でありながら、海岸線は２倍に達する。入り込んだ海岸線には多くの岩礁があり、豊かな海洋資源に恵まれている。[31)]

しかし、この自然的な城壁は自覚的に認識されていたわけではない。自然の恵みのように城壁の機能を果たしていたのである。海防が認識され出すのは、18世紀後半から19世紀にかけて欧米の艦船が日本近海に出没するようになってからであり、その場合にも何をどのように守るのかという防衛目的とそれを正統化する理念が求められた。つまり、ナショナル・アイデンティティの構築が急がれたのである。[32)]

大陸国家で海から攻められたことがなかった中国が、アヘン戦争（1840～42年）で海から襲われ、ダメージを受けたことが、日本側の危機感を招くことになったことはいうまでもない。こうした歴史を概観すると、わが国は城壁を持つことなく、平和を維持できた稀な国であったことが分かる。

5　都市の中心性と建築思想

（1）中心が空虚な東京

ヨーロッパ都市は同心円的であり、中心には教会や市庁舎、証券取引所、市場などがあって充実している。東京も中心をもっている。しかし、その中

心は空虚である。いわば禁城であって、緑に蔽われ、濠に防御されており、立ち入ることができない。道路交通はこの円環を永久に迂回しなければならない[33]。ロラン・バルトのこの指摘は有名だが、これは現在の東京と皇居に限られるのではなくて、往時の平安京も平城京もそうだった。天皇が日常起居する内裏（だいり）は、高い塀で囲われ、立ち入りが禁じられた都市の真空地帯だった[34]。江戸以外の城下町でも、お城は庶民には遠い場所であり、縁のない権力空間だったから同様である。

だからロラン・バルトの指摘は江戸時代には普遍性があったといえる。現代の旧城下町でも城郭やその跡地に車道を走らせることはあまりないので、中心が空虚である伝統はまだ続いているといえないことはない。

中心がないのは、日本料理も同様であるとロラン・バルトはいう。フランスでは、食事に順序を与え、さまざまな儀式によって料理の中心が生まれる。しかし、日本料理では次々に料理が並べられる場合が多く、どれから先に食べるかという特権的な順序がない。とくにスキヤキなどは、途絶えることのないテキストのように中心をもたない[35]。

一般の建物も左右非対称で正面性にこだわらない建物が多く、外部から中心をうかがうことができない。内部的には床の間が上位空間となる場合があるが、外からは見えない。しかも、建物自体が緑や樹木に囲まれ、輪郭さえもはっきりとは見えないことがある。住居や建物よりも自然環境を重視している節がある。

（2）木造建築の可能性

ヨーロッパ人は石造建築に永遠性を求めたが、わが国の木造建築はきわめて短命である。個人の木造住宅は一世代30年で建て替えるのが通例となっている。木造建築の基本精神は永遠性ではなく、つねに新しく時間的にも有限なものである。江戸時代の庶民の長屋などは火事で焼けることを前提にした安普請だった。火事の後は新築需要で経済が活性化する慣わしだった。それ

に対して、ヨーロッパの石造建築は数百年の寿命を誇るものが多い。[36] 木造建築でもイタリアなどでは、よく使い込まれた古いものほど評価され、市場価値も高いとされる。

日本の木造建築もそうした短命のものばかりではなかった。とくに大規模な寺社などは違っていた。「古代建築は一定の役割を果たすと廃棄されるのでなく、これを解体し、移築再生する例が少なくなかった。有名な例では、法隆寺東院伝法堂は住宅を移築し仏堂として再利用したものであるし、唐招提寺講堂は平城京朝集殿の軸部が再用されている。」現在でも「国宝・重要文化財として指定されている建築物のなかには、いくつかの偶然が重なって生きながらえているものもあるが、その多くは中世・近世の幾度にもわたる修理や維持管理を経て、現在へ継承されてきた。」[37] とされる。

適切な修理や維持管理が行われれば、木造建築といえども長い寿命が可能であり、江戸時代以前はそうして町並みの安定が保たれたのである。「木造建築の修理には、その破損状況に応じて①部分修理（軽微な破損部分の補修。化粧材、軒廻り、建具など）、②屋根替え修理（屋根の全面葺替）、③半解体修理（軸部の一部を解体、部材の取替）、④解体修理（軸部の全面解体修理）に分かれる。このうち、③と④を根本修理という。修理の周期は、構造形式・材料・木割の大小によって異なるが、根本修理はおおむね100年周期で実施され、その間何度かの部分修理や屋根替え修理が挟まる。」[38] といわれる。

このようにして東大寺や出雲大社、日光東照宮、姫路城などは維持保全されてきたのである。そうした地域のランドマークが健在であることは、町並みや景観に重要な影響を与えている。よく話題になる伊勢神宮の式年遷宮は奈良時代以来20年または21年ごとに再建されてきたが、それは老朽化のゆえではない。建物の「型」を保全し、技術と作法を継承するためのものなのである。

（3）木造建築における型の継承

つまり「式年造替というシステムは建て替えとはいえ、本殿の形式は可能な限り忠実に元のものを写すのであって、建築の生命は物質よりは『型』に宿っているということである。この型の継承は、茶道や華道など日本文化に通底する伝承方法のひとつであって、必ず人から人へと、人を媒介として技術や作法が引き継がれてゆく。木材や材料のストック、大工をはじめとする諸職人が、次の世代へ技術を伝承していくシステムがあってはじめて、20年後の式年造替が可能になる。伊勢の例をとって、しばしば木造建築の永続性よりも更新性が強調されるが、人や技術と建築の関わりという点からみれば、両者はけっして矛盾するところがない。永続と更新は、日本の建築のライフスタイル観にとって対立概念ではなく、むしろ相補う両側面であると捉えることが重要であろう。[39]」

ここから建築と都市の関わりの基本相が見えてくる。そこには永続と更新が調和的に存在していた。「日本の前近代の建築と都市には、永続と更新の両面の価値観が矛盾することなく同時併存していたと考えられる。これは西欧における建築・都市観と大きく異なる点であって、そのことは西欧に見られる『廃墟』という美意識が日本ではついに成立しなかったことに象徴的にあらわれている。[40]」のである。

廃墟に関しては、ギリシャのアテネやスパルタで観察した経験があるが、そこには抗争の歴史観が反映されている。石造建築の時間の長さもあるが、歴史観が大きい。ハプスブルク王朝の女帝マリア・テレジアがシェーンブルン宮殿の庭の一角にカルタゴの架空の廃墟を造らせたが、それは世界支配の野望を反映したものだった。

（4）「移し」と「写し」と「見立て」

日本の前近代の都市と建築には「移し」と「写し」と「見立て」の思想があった。「建築や都市の移動は、単に場所を『移す』だけでなく、もとの姿を『写

す』ことと不可分であった。たとえば、京都を模した小京都は室町期に各地につくられた。これは京都という都市のイメージを新たな場所に『見立てる』行為が前提になっている。土佐の中村という小京都は、京都の公卿であった一条氏が、室町時代に地方に下向して建設した都市であったが、山、川、碁盤目状の道路など平安京を写したものであった。[41)]」

現代でも萩や津和野、松江、高山、松本などが小京都と称されている。全国に60前後があるが、室町時代のような精密な「写し」や「見立て」はなく、観光政策的要因が大きい。

戦国、室町時代は違っていた。「戦国大名たちは領国経営のかたわら、しばしば京都に滞在し、（三条西）実隆のような一流の文人から熟成した京文化を吸収した。」「こうした京都の文物だけでなく、彼らの目に華やかな都市景観美を謳歌する京都の姿があったことは疑いない。北条氏直は小田原の城下町建設にあたり、京の町家の板葺をまねて、草葺民家を京風の板葺屋に改めたと伝え、大内氏は山口に『帝都の模様』を写した。復古的な京都を移植しようとした中村でさえ、町人地には町家が櫛化する景観が現出したものと想像される。[42)]」という。

（5）小京都の思想

重要なことは、単に京都をコピーするだけではなかったことである。戦国大名たちが「着目したのは洗練された文化や都市生活を育んできた総合的な文化環境としての京都であり、京都を手本にした町づくりは新興都市に歴史的な風格を与え、本当の都市居住とは何かを住民に啓蒙することに狙いがあった。[43)]」という点である。

小京都はこの「見立て」を発展させたところに本質がある。「その真骨頂は、京都に範を求めながらも、伝統や歴史に深い造詣をもつ為政者が、在地にさまざまな形で京都を見立て、土地に根差した独自の都市文化を開花させたところにある。小京都の形成を首都京都の地方への、上から下への文化伝

播とみるのは一面的な見方であって、地方の側からの主体的摂取という側面を忘れることはできない。そしてそこには日本独自の『見立て』という技巧的な隠喩と、中世を通して培われた地方の潜在力が認められる。」「越前の小京都一乗谷では、朝倉家居館にも大量の茶器・茶器・香の遺物が出土している。また将棋・碁・双六などの駒も発見され、大名以下町人に至るまで深く京文化に通暁しており、多彩な都市生活を享受していたことが窺われるのである。[44]」

京都の祇園祭の様式も導入され、山鉾や鷺舞も伝播したが、津和野などにその伝承が残っているのは興味深いものがある。小江戸や○○銀座などの例もあるが、戦国大名たちのような気慨と理念があるだろうか。

（6）景観の心理操作

「見立て」は、風景においても顕著だった。まったく違う風景への憧憬や思いを象徴として、身近な風景に映し出す心的作用である。中国洞庭湖に注ぐ瀟湘（しょうしょう）二川の風光をテーマにした「瀟湘八景」に倣って、16世紀以降、近江八景や金沢八景、日光八景、多摩川八景などが見立てられ、人口に膾炙してきたのが好例である[45]。そこでは風景は様式化され、観念となっている。さらに和歌に詠まれ、絵図に描かれ、情報として流布する中で多くの「名所」が成立した。松島、天橋立、厳島の日本三景を提唱した林鵞峰も現地を訪れた形跡はない。当時の文人にとっては、実景を見たかどうかより、詩的なイメージを起こす景観として受け止められていたかが肝要だったようだ[46]。

さらにいえば、風景はむき出しの自然ではなくて、手が入れられ、生活や歴史がにじんだ由緒ある自然だった。山の辺景観はその典型である。それらは和歌の枕詞などで言語感覚的に国民の深層意識に刷り込まれた。「ひさかたの」「あおによし」「たらちねの」「うつせみの」「くさまくら」「あかねさす」「あしびきの」「たかさごの」などの枕詞は、聞いただけで共通の風景や美観を呼び起こした。そうして風景や美観が定型化、類型化、記号化されていく。

自然そのものより言葉が先行し、表現され、評価され、評判となった風景や美観が「名所」として確立していったのである。[47]

（7）寓居の思想

高温多湿のわが国では、自然と一体化し、高床式で室内を南北に風が吹き抜けるような構造を旨としてきた。京都の町家の造りが典型的である。取り外しができる襖や障子はその工夫のひとつである。総じて簡素な造りの住居がある種の理想とされてきた。

たとえば、『徒然草』第55段には「家の作り様は、夏を旨とすべし。冬は、いかなる所にも住まる。暑き頃、悪(わろ)き住居は、堪へ難き事なり。」とある。これは兼好の個人的な意見でなく、何人かの談話をまとめたものなので、世間の通念といえる。[48]ちなみに兼好法師は京都の山科で隠遁生活をしていた。

鴨長明の『方丈記』はさらに削ぎ落とされている。「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例(ためし)なし。世に中にある、人と栖(すみか)と、またかくのごとし。」とあるように、無常感が前提にある。鴨長明は大火や天変地異を経験し、人生の仮の宿りである住居も簡素を旨と考え、30歳過ぎに先祖の家を出て鴨川べりに小さな庵を結んだ。60歳になってからは、さらにそれまでの100分の１もない一丈四方高さ７尺（約３メートル四方、高さ２メートル）の宿りを平安京の外れの日野山中に結んだ。[49]

この「仮の庵」は分解可能な組立式の木造住宅で台車二台にて運搬された、と『方丈記』にある。関心をもって現地調査をした芦原義信は、その環境の厳しさから相当の覚悟が必要で、尋常の決意ではなかったであろうと推測している。[50]鴨長明の方丈の庵は例外的なものであろうが、わが国における自然と建物の関係の究極の位相を提示している。

（8）浮上しない都市景観

英文学者で作家の吉田健一（1912～1977年）がたびたび金沢を訪れていることを知り、金沢の町並みや佇まいがどのように描かれているかに興味をもった。しかし、エッセー「金沢」にも「金沢、又」にも「金沢、又々」にも、金沢の町並みや佇まいは出てこない。落ちついたバーで味わう金沢の空気や、九谷の杯で飲む心地よさや、犀川と浅野川が流れている恵沢さなどに触れられているだけである。[51)]

しかし、「パリ再訪」というエッセーには、「昔のパリは灰色の空の下に幾世紀もの煤で黒くなつた建物が並んでゐたやうに覚えてゐる。」「パリと言ふと街燈に照らされた町並が先づ頭に浮ぶ。」というように町並みについての文章がある。[52)]

これはわが国の町並みが時間的安定性に欠けることや、評価すべき態様をなしていないことがあるかも知れない。金沢も一定の区域以外は平凡な町並みなので、外部空間よりも洗練された内部空間が都市の魅力を滲ませていたと推察される。

川端康成（1899～1972年）が1968年にノーベル文学賞を受賞したときの記念講演「美しい日本の私」にも町並み、都市景観に触れた箇所はなかった。では、川端康成は何をもって美しい日本の実体としていたのだろうか。彼は道元禅師の「春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえて冷(すず)しかりけり」や、良寛の辞世「形見とて何か残さん春は花 山ほととぎす秋はもみぢ葉」などを引いて、雪月花、花鳥風月、山川草木、落花流水など日本の自然美や風趣を称えている。建物などの人工物はまったく出てこない。[53)]

しかし、彼も都市に無関心だったわけではないと後で知った。「美しい日本の私」では都市や町並みに触れていないが、個人的には京都が近代化で壊れていくことを誰よりも案じていたのである。そして、日本画家の東山魁夷に依頼する。京都らしさがなくなる前に描き残しておく作業である。1960年代前半のことだ。

東山魁夷が川端の願いに応えて描いた畢生の作が「年暮る」(1968年) である。東山三条辺りの伝統的な町家の屋並みにしんしんと雪が降っている。人の姿は見えないが、窓からは灯りがもれ、生活の温もりが伝わってくる。しかし、実はその風景は当時すでに失われていた。東山魁夷は止むを得ず、古いスケッチをもとに、残して置きたかった京都を描き、川端に画家として応えたのである。

2011年東日本大震災後、人々に最も多く歌われたのは「故郷(ふるさと)」と「朧月夜(おぼろつきよ)」だった。「故郷」も「朧月夜」も山の辺の景観を描出している。高野辰之作詞、岡野貞一作曲の「朧月夜」は以下のような歌詞である。

菜の花畠に　入日薄れ
見わたす山の端　霞ふかし
春風そよ吹く　空を見れば
夕月かかりて　匂い淡し

里わの火影(ほかげ)も　森の色も
田中の小路を　たどる人も
蛙の鳴くねも　鐘の音も
さながら霞める　朧月夜

齋藤慎爾は「東日本大震災という天災と人災が、この美しい風景を壊滅させたことを、私たちは流した涙とともに決して忘れまい。」[54]と書いている。「故郷」も同様の情景を歌っているが、わが国の山の辺の景観の特徴、ふるさと意識における自然の優位性を物語っている。

おわりに

野辺、里山、奥山といった全国共通の風景の展開が、日本人の居住形態、生活意識、風景認識と不即不離であることは否定できないように思われる。

それが都市形成や市民意識を規定したことも同様である。「故郷」の歌詞、「兎追ひし彼の山、小鮒釣りし彼の川」は典型的な山野辺の景観を彷彿とさせる。また三番目の歌詞、「志を果たして、いつの日にか帰らん、山は青き故郷、水は清き故郷」は都市が立身出世のための仮の場であり、精神的拠点は山の辺のふるさとにあることを物語っている。

近代化が進み、自然条件や地勢、地形は克服されたかに見えるが、深層意識にある山の辺思考には今日でも無視し得ないものがあるように思われる。中国、台湾の風水思想のように明確でないだけに、無意識のレベルで影響を与え続けているのである。

1）樋口忠彦『日本の景観―ふるさとの原型―』ちくま学芸文庫、1993年（原本は春秋社、1981年）30～33ページ。
2）同上書、110、120ページ。
3）同上書、181ページ。
4）涌井雅之『景観から見た日本の心』NHK出版、2006年、46ページ。
5）樋口、前掲書、120～121ページ。
6）同上書、121ページ。
7）同上書、136～137ページ。
8）同上書、154ページ。
9）香山健一「田園都市国家への道」内務省地方局有志『田園都市と日本人』講談社学術文庫、1980年（原本は1907年刊）6～7ページ。
10）内務省地方局有志、同上書、347ページ。
11）渡辺京二『逝きし世の面影』平凡社ライブラリー、2005年（原本は葦書房、1998年）、439ページ。
12）1825～1909年、プロイセン海軍のエルベ号艦長、1860年に来日した。
13）渡辺京二、前掲書、440～441ページ。
14）イザベラ・バード『日本奥地紀行』高梨健吉訳、平凡社（東洋文庫240）1973年（原著は1880年）、152ページ。
15）同上書、133ページ。
16）赤坂憲雄『イザベラ・バードの東北紀行（会津・置賜篇）』平凡社、2014年、157ページ。
17）オギュタン・ベルク『日本の風景・西洋の景観 そして造景の時代』篠田勝英訳、講談社現代新書、1990年、144ページ。
18）同上書、151ページ。
19）同上書、147～148ページ。
20）土岐寛『地方自治とまちづくり』敬文堂、2002年、127ページ。
21）オギュタン・ベルク、前掲書、155ページ。
22）増田四郎『ヨーロッパとは何か』1967年、岩波新書、192～193ページ。
23）増田四郎「都市生活の精神的基盤―新しい都市論出現のために―」『都市問題』53巻1号、1962年1月、28ページ。

24) 同上。
25) 同上論文、25～26ページ。
26) 同上論文、28～29ページ。
27) 同上論文、29ページ。
28) 領主権力に反抗する全市民団。
29) 芦原義信『東京の美学―混沌と秩序―』岩波新書、1994年、11、13ページ。
30) 田中充子『プラハを歩く』岩波新書、2001年、27～28ページ。
31) 松本健一『海岸線の歴史』ミシマ社、2009年、164ページ。
32) 同上書、167、169ページ。
33) ロラン・バルト『表徴の帝国』宗左近訳、ちくま学芸文庫、1996年（原著は1970年）、52、54ページ。
34) 上田篤『都市と日本人―「カミサマ」を旅する―』岩波新書、2003年、49ページ。
35) ロラン・バルト、前掲書、39～40ページ。
36) 芦原義信、前掲書、51ページ。
37) 伊藤毅『都市の空間史』吉川弘文館、2003年、310、312ページ。
38) 同上書、312ページ。
39) 同上書、315ページ。
40) 同上書、318ページ。
41) 同上。
42) 同上書、158ページ。
43) 同上書、158～159ページ。
44) 同上書、159ページ。
45) 涌井雅之、前掲書、33ページ。中村良夫『風景を創る―環境美学への道―』NHK ライブラリー、2004年、71ページ。
46) 島尾新・長谷川成一編『日本三景への誘い』清文堂出版、2007年、25～26ページ。
47) 奥野健男『増補 文学における原風景』集英社、1989年（初版は1972年）、189、191、193ページ。涌井雅之、前掲書、120ページ。
48) 兼好『徒然草』島内裕子校訂・訳、ちくま学芸文庫、2010年、119～120ページ。
49) 三木卓『私の方丈記』河出書房新社、2014年、30～32ページ。
50) 芦原義信、前掲書、152～153ページ
51) 吉田健一『吉田健一集』（現代の随想30）彌生書房、1983年、99～106ページ。
52) 同上書、80～81ページ。
53) 川端康成『美しい日本の私』講談社現代新書、1969年、6～13ページ。
54) 齋藤慎爾「唱歌 こころの〈四季〉」『てんとう虫』アダック、45巻4号、2013年4月、3ページ。